

# 学校評価の分析方法に関する研究

— 学校評価質問紙の作成とその分析を中心に —

A Study on Methods of Analysis of School Evaluation:  
Making of School Evaluation Questionnaire and the Analysis

石 上 靖 芳\*

Yasuyoshi ISHIGAMI

（平成21年10月6日受理）

**要約** 学校評価システムの導入が図られるなか、学校評価に関する質問紙調査が多くの学校で実施されている。しかし、そのデータを用いた分析方法は確立されていなく、労力をかけ集計したデータが有効に活用されていない現状がある。そこで本研究においては、静岡県S市A中学校で実施された学校評価の質問紙調査を対象に因子分析、重回帰分析などの多変量解析を用いることによってデータの構造化とその関連性について分析した。その結果、学校に内在する成果や課題について具体的に明らかにするとともに評価方法に関する新たな視点を示した。

**キーワード：**学校評価 学校尾評価システム 学校質問紙調査 多変量解析

## 1. はじめに

学校の自主性・自律性を高め特色ある学校づくりを推進すること、あるいは、学校の教育活動の説明責任、結果責任という観点から、各公立学校においては、ここ数年来にわたり学校評価に関する取り組みが真摯に進められてきている。この学校評価の取り組みに関しては、平成12年1月の学校教育法施行規則の改正により、地域住民の学校運営への参画の仕組みを制度的に位置付け、同年4月から学校評議員制度が導入されたことがその端緒であると捉えることができる。学校評議員制度の趣旨は、文部科学省（2000a）によれば、「学校の教育目標・計画や地域との連携の進め方などに関する保護者や地域住民の意見を聞くことを通じ、その理解や協力を得ながら特色ある教育活動を主体的かつ積極的に展開していくことにある。」としている。すなわち、学校の職員以外の外部の人を評価委員として迎えることにより、違う視点、視角から学校の運営、取り組みに関して意見を聞き、教育活動を改善して行くという取り組みにある。ちなみにこの学校評議員の設置状況は、文部科学省（2000b）によれば、平成16年度、公立小学校77.2%、公立中学校78.6%に及んでいる。

次の制度的な枠組みの進展は、学校評価システムの各公立学校への導入である。これは、学

---

\* 大学院教育実践高度化専攻

校評議員制度を継承ししつとも発展させ、学校関係者評価委員会を新たに学校の中に位置づけることにより、学校運営に関して設定した目標と教育活動の成果を検証し、その結果を公表するという一連のシステムとしての制度である。この制度の実施に関して文部科学省では、学校教育法（平成19年6月）、学校教育法施行規則（平成19年10月）を改正している。

この制度の導入及び実施に関しては、現在、各都道府県教育委員会等において、真摯に研究がなされているところであるが、具体的に常勤していない学校関係者評価委員に教育活動の何の評価してもらうのか、評価を公表することによって学校の差別化につながらないのか、学校評価書の評価項目の設定の在り方等、課題が山積していると言ってもよい。

こうした学校評価に関する一連の動きの中で、学校評価に関する具体的なデータを得るための自己評価を基盤とする質問紙調査（アンケート）が重要な役割を果たしている。これは、児童・生徒たちを対象とするもの、保護者を対象とするもの、教職員を対象とするものと3種類に大別することができる。学校評価システムにおける公開する学校評価書においては、これらから得られた情報をもとに学校の教育活動に関する評価を実証的なデータに基づいて記述することが一般的である。例えば、静岡県S市の場合、経営の重点に関するもの、教育課程・学習指導、生徒指導、進路指導などの10項目の領域に関する評価項目を設定することとなっている。この質問紙調査に関しては、その集計に莫大な時間と労力がかかるため、教務主任を初めとする担当者泣かせの仕事となっているのも事実である。こうした課題を解決するためにマークシート方式で実施したアンケートを自動集計するソフトウェア（無償）が慶応大学の金子らの研究グループによってS Q S（Shared Questionnaire System）が開発され、公開されている。一部機種によって不具合が見られる場合もあるが、現在学校に導入されている機材だけで、このシステムを利用できるのでそのメリットは極めて高く、日本の多くの学校においてこのシステムが導入され利用されていると推察される。

また、せっかく大量のデータを集約したにも関わらず、質問紙の項目を集計しその割合を示しているに過ぎないのが現在の学校の現状と言っている。これらの集約されたデータをより有効に活用するために、データを構造化し、その意味や関連性を具体的に可視化することができれば、この質問紙調査の実施は大変意義が深いものとなり、学校評価の信憑性を高めるとともに信頼を引き出せるデータの提供に繋がる可能性を秘めている。このデータの利用に関して金子（2005）は、クラスや学校が属する集団の平均値や分散と比べることによって、一定程度の客観性が得られとし、それをもう一步進めて、計画・実践・チェック・改善というマネジメントサイクルの一環として学校改善のプロセスとしてとらえる重要性を述べている。また、善野（2007）は、評価項目が学校の都合のよい設問に偏っていないかを指摘した上で、意識のズレや届いていない不確かな情報を見直そうとしているか、明確になった課題を焦点化しているかの客観性が問われると述べている。以上のことから、よりデータを精細に分析しその客観性を高めることが求められているのである。

そこで本研究においては、平成20年度における静岡県S市A中学校における学校評価に関する質問紙調査を対象に多変量解析を用いることにより、データの構造化や集約を行い、具体的な成果と課題を可視化することなど具体的な評価方法を確立することを目指す。具体的には、生徒を対象とした質問紙調査及び保護者を対象とした質問紙調査の2つを対象として分析を行う。なお、この質問紙調査の実施は、筆者が平成20年度A中学校在職時に担当者として実施したものである。

## 2. 調査方法

学校評価に関する質問紙調査は、生徒、保護者を対象に下記の(1)～(3)の通り実施した。質問紙調査の設問項目は、S市の学校評価のガイドラインの手続きに従い、学校の教育目標、重点目標に関わる評価、教育活動に関わる評価、生徒の育ち等の内容項目に関連させて構成した。質問紙調査1は、県内S市A中学校の全家庭数である保護者を対象に12月中旬に学級担任を通じて配布・回収された。その結果、81.2%の回収率であった。また、質問紙調査2は、A中学校の1・2・3年の全生徒を対象として、12月中旬に各学級担任によって帰りの会等を利用して実施された。回収率は87.5%だった。

### (1) 質問紙調査1

- ・対象者・・・静岡県S市A中学校1・2・3年生徒保護者510人
- ・回収率・・・81.2% (414人／510人)
- ・調査時期・・・平成20年12月中旬
- ・調査内容・・・所属学年、性別の属性に関する設問2項目、学校の教育活動及び生徒の育ちに関する評価項目の設問19項目と学校教育に関する意見を問う設問1項目（自由記述）の22項目で設定

### (2) 質問紙調査2

- ・対象者・・・静岡県S市A中学校1・2・3年生徒保護者562人
- ・回収率・・・87.5% (492人／562人)
- ・調査時期・・・平成20年12月中旬
- ・調査内容・・・所属学年、性別の属性に関する設問2項目、教育活動及び学習に関する内容の設問22項目の計24項目で設定

学年や性別などの属性に関する質問項目と自由記述以外の質問項目は、「4：強くそう思う」「3：そう思う」「2：思わない」「1：全く思わない」の4段階尺度の選択肢とした。

### (3) 集計方法

集計には、オープンソフトウェアであるS Q S (Shared Questionnaire System) で質問紙調査をマークシート方式で作成した。回収したアンケートは東芝製複写機（複合機）を用いて読み込み、デジタルデータに変換した。そしてそのデータをS Q Sのマークシート読み込みソフトウェアを用いて集計し、エクセルのデータとして出力した。

また、データの分析に関してはS P S S Ver. 15.0を使用した。

## 3. 結果と考察1（質問紙調査1）

### 3-1 (1) 保護者対象質問紙調査項目の因子分析

学校評価として保護者を対象とした質問紙調査18項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈の可能性から4因子を抽出した。そこで再度4因子を仮定し、主因子法によるプロマックス回転による因子分析を行った。この結果、因子負荷量の低い項目であった「11:お子さんは地域の行事に積極的に参加している」の1項目を除外し再度プロマックス回転による因子分析を行った。なお、回転前の4因子で16項目の全分散を説明す

る割合は、52.7%であった。

第1因子は、「14:学校では、生徒とのコミュニケーションを重視した生徒指導に取り組んでいる」「21:学校はいろいろなことに相談しやすい」「17:学校では自ら健康管理できる生徒を育てている」など、学校におけるコミュニケーションを主体とした教育活動の質的な充実及び教育課程の充実に関する内容の項目が高い負荷量を示していたので「教育活動の充実」因子と命名した。第2因子は、「6:お子さん思いやりのある行動ができる」「4:お子さんは時と場に応じて美しい言葉遣いをこころがけている」など、生徒の徳目の涵養に関する内容の項目が高い負荷量を示していたので、「人間性・道徳性の涵養」因子として命名した。第3因子は、「10:お子さんは授業の内容をよく理解している」「9:お子さんは生活に見通しをもち、時間を有意義に活用している」など、授業への理解や積極的な参加、学習の計画性に関する内容の項が高い負荷量を示しているため、「積極的授業参加」因子として命名した。第4因子は、「19:学校公開・授業参観日などを通して積極的に学校を公開している」「18:学校は、学校たより・学年だより・電子メール等で情報を発信している」の2項目であるが、学校の積極的情報公開や情報の提供に関する項目に高い負荷量を示しているため、「開かれた学校の推進」因子として命名した。

表1. 保護者質問紙調査の因子分析の結果

項 目 内 容	I	II	III	IV
14:学校では、生徒とのコミュニケーションを重視した生徒指導に取り組んでいる	0.83	-0.07	-0.07	0.00
21:学校はいろいろなことに相談しやすい	0.69	0.00	-0.07	0.06
12:学校では一人一人の生徒の意見を大切にした授業が実施されている	0.66	-0.02	0.23	-0.10
17:学校では自ら健康管理できる生徒を育てている	0.65	0.10	0.01	-0.06
16:学校では適切な進路指導が行われている	0.65	0.09	-0.02	-0.06
13:学校では教育活動全般を通じて命の尊さや相手を思いやる気持ちを育てている	0.64	-0.13	0.05	0.06
15:学校では、体育祭や合唱祭などの学校行事が充実している	0.63	0.03	-0.05	0.10
20:学校は地域と小学校と連携を図るなど教育活動を推進している	0.35	0.06	-0.07	0.22
6:お子さん思いやりのある行動ができる	-0.06	0.71	-0.10	0.02
4:お子さんは時と場に応じて美しい言葉遣いをこころがけている	0.08	0.53	0.05	0.00
5:お子さんはいつも誰に対しても気持ちよい挨拶ができる	0.14	0.49	0.01	-0.09
7:お子さんはルールを守るなどの規範意識が育っている	-0.09	0.49	0.12	0.06
10:お子さんは授業の内容をよく理解している	-0.01	-0.10	0.78	0.01
9:お子さんは生活に見通しをもち、時間を有意義に活用している	-0.04	0.14	0.57	0.08
8:お子さんは、自分の考えや意見を進んで表現している	0.02	0.16	0.39	-0.02
19:学校公開・授業参観日などを通して積極的に学校を公開している	0.06	-0.01	-0.03	0.71
18:学校は、学校たより・学年だより・電子メール等で情報を発信している	0.03	0.00	0.14	0.48
因 子 間 相 関	I	II	III	IV
I	—	0.17	0.42	0.47
II		—	0.45	0.15
III			—	0.27
IV				—

### 3－（2）下位尺度得点の関連

保護者を対象とした学校評価の因子分析結果において、各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点を、各下位尺度得点とした。表2に各下位尺度得点の平均値と標準偏差を示す。内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、「教育活動充実」は、 $\alpha = .86$ 、「人間性・道徳性の涵養」は、 $\alpha = .64$ 、「積極的授業参加」は、 $\alpha = .64$ 、「開かれた学校の推進」は、 $\alpha = .54$ であった。表2に下位尺度間相関を示す。「教育活動充実」「人間性・道徳性の涵養」「積極的授業参加」「開かれた学校の推進」因子のそれぞれの各下位尺度間においては、1%水準で相関関係が認められた。

表2. 保護者質問紙調査の下位尺度間相関、平均、SD、 $\alpha$ 係数

	教育活動 充実	人間性・道徳 性の涵養	積極的授業参 加	開かれた学校 の推進	平均	SD	$\alpha$
教育活動充実	—	.18**	.33**	.41**	2.41	.40	.86
人間性・道徳性の涵養		—	.38**	.14**	2.12	.39	.64
積極的授業参加			—	.24**	2.47	.49	.64
開かれた学校の推進				—	1.88	.43	.54

\*\* $p < .01$

### 3－（3）学年群と下位尺度得点による分散分析結果

質問紙調査において、学年ごとの評価を調べるために、中学1年保護者（125人）、中学2年保護者（149人）、中学3年保護者（140人）の3つに分け学年群を設定した。この学年群を独立変数、下位尺度の「教育活動充実」「人間性・道徳性の涵養」「積極的授業参加」「開かれた学校の推進」の4得点を従属変数とする3水準×4要因の分散分析を行った。分散分析の結果、学年群（ $F(2, 411) = 4.13, p < .05$ ）、下位尺度得点（ $F(3, 409) = 211, p < .001$ ）の主効果が有意であったが、交互作用（ $F(6, 820) = .32 \text{ n.s.}$ ）は有意ではなかった。学年群の主効果が有意だったので、多重比較を行った。その結果、1年保護者＞2年保護者＞3年保護者（LSD法、 $p < .05$ ）の順であった。表3に学年群と下位尺度得点の分散分析結果を示す。したがって1年保護者、2年保護者、3年保護者の順で評価が高かったことになる。これは、1年生はまだ学校に入学したばかりで、問題もあまり多くないことなどから総じて評価が高かったためだと推察することができる。同様に下位尺度得点の多重比較を行った。その結果、「積極的授業参加」＞「教育活動充実」＞「人間性・道徳性の涵養」＞「開かれた学校の推進」（LSD法、 $p < .05$ ）の順であった。したがって保護者は生徒の積極的授業参加、教育活動充実、人間性・道徳性の涵養、開かれた学校の推進の順で評価していたこととなる。

授業をはじめとする教育活動の充実、学校の生命線ともいえるべきもので、保護者からすれば、見聞きした日常的な活動の一環を評価するもので、見えやすく評価しやすい内容のものである。こうしたことがこのような結果になったと考えることができる。「開かれた学校」因子が一番低いということは情報の提供量が少なくと評価しているものであり、学校改善の切り口の1つの指標として捉えていく必要があるだろう。



表3. 学年群と下位尺度得点による分散分析結果（保護者）

	1年保護者 (n=125)	2年保護者 (n=149)	3年保護者 (n=140)	校種群 F	因子得点 F	交互作用 F
教育活動充実	2.47 (.43)	2.38 (.37)	2.40 (.40)	4.1*	211***	.32
人間性・道徳性の涵養	2.16 (.41)	2.13 (.42)	2.08 (.34)			
積極的授業参加	2.54 (.49)	2.46 (.50)	2.40 (.49)			
開かれた学校の推進	1.94 (.38)	1.86 (.45)	1.85 (.44)			

\*\*\* p&lt;.001 \*p&lt;.05 カッコ内は標準偏差

#### 4. 結果と考察2（質問紙調査2）

##### 4-（1）生徒対象質問紙調査項目の因子分析

学校評価として生徒を対象とした質問紙調査19項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈の可能性から4因子を抽出した。そこで再度4因子を仮定し、主因子法によるプロマックス回転による因子分析を行った。この結果、因子負荷量の低い項目であった「11：地域の行事に積極的に参加している」の1項目を除外し、再度プロマックス回転による因子分析を行った。なお、回転前の4因子で18項目の全分散を説明する割合は、45.1%であった。

第1因子は、「4：学校生活やクラスで大切にされていると感じている」「3：進んで自分の意見や考えを表現している」「16：先生は対話を重視した生徒指導をしている」など、一人一人の生徒の個を大切にした教育活動や、先生たちの対話を重視した生徒指導の推進や体制などに関する内容の項目が高い負荷量を示していたので「個及び対話を重視した教育」因子と命名した。第2因子は、「20：自ら健康管理ができるようになった」「8：事前に計画を立て時間を有効に活用している」など、生徒の自己管理能力の評価に関する内容の項目が高い負荷量を示していたので、「自己管理能力育成」因子として命名した。第3因子は、「11：個人の考えを大切にしたい授業が行われている」「10：各教科の授業はわかりやすい」など、個の考えを大切にしたい授業の展開や授業の分かりやすさに関する内容の項目が高い負荷量を示しているため、「授業理解促進」因子として命名した。第4因子は、「7：学校のルールを守ろうと努力している」「2：時と場所において美しい言葉使いができる」など学校のルールを守ることや美しい言葉遣いができるなどを評価する内容の項目に高い負荷量を示しているため、「規範意識育成」因子として命名した。

表4. 生徒質問紙調査の因子分析の結果

内 容 項 目	I	II	III	IV
4: 学校生活やクラスで大切にされていると感じている	0.62	0.13	0.03	0.03
5: いつ誰に対しても気持ちよい挨拶ができています	0.52	0.03	0.04	0.13
18: 行事が適切に位置付いている	0.39	0.38	0.01	0.16
3: 進んで自分の意見や考えを表現している	0.38	0.09	0.01	0.15
19: 悩みがあればすぐ相談できる体制となっている	0.36	0.30	0.04	0.08
17: 各行事によって個性が引き出されている	0.34	0.16	0.09	0.02
16: 先生は対話を重視した生徒指導をしている	0.32	0.15	0.21	0.03
20: 自ら健康管理ができるようになった	0.12	0.54	0.29	0.07
8: 事前に計画を立て時間を有効に活用している	0.27	0.51	0.12	0.02
12: 話し合ったり考えたりする授業が行われている	0.03	0.50	0.10	0.05
9: 地域行事に進んで参加している	0.00	0.36	0.05	0.06
14: 学力向上のために小テストが計画的に実施され有効である	0.04	0.33	0.24	0.03
11: 個人の考えを大切にしたい授業が行われている	0.04	0.17	0.74	0.00
10: 各教科の授業はわかりやすい	0.01	0.04	0.57	0.02
13: 授業ではコンピュータ室や図書館が有効に活用されている	0.09	0.12	0.21	0.07
7: 学校のルールを守ろうと努力している	0.17	0.32	0.06	0.55
2: 時と場所において美しい言葉使いができる	0.10	0.03	0.02	0.46
6: 相手を思いやった行動をとることができる	0.40	0.12	0.03	0.45
因子間相関	I	II	III	IV
I	—	0.51	0.43	0.31
II		—	0.60	0.34
III			—	0.28
IV				—

## 4- (2) 下位尺度得点の関連

生徒を対象とした学校評価の因子分析結果において、各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点を、各下位尺度得点とした。表5に各下位尺度得点の平均値と標準偏差を示す。内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、「個及び対話を重視した教育」は、 $\alpha = .70$ 、「自己管理能力育成」は、 $\alpha = .57$ 、「授業理解促進」は、 $\alpha = .49$ 、「規範意識育成」は、 $\alpha = .53$ であった。表5に下位尺度間相関を示す。「個及び対話を重視した教育」「自己管理能力育成」「授業理解促進」「規範意識育成」因子のそれぞれの各下位尺度間においては、1%水準で相関関係が認められた。

表5. 生徒質問紙調査の下位尺度間相関、平均、SD、 $\alpha$ 係数

	個及び対話を重視した教育	自己管理能力育成	授業理解促進	規範意識育成	平均	SD	$\alpha$
個及び対話を重視した教育	—	.50**	.42**	.40**	2.2	.43	.70
自己管理能力育成		—	.39**	.36**	2.2	.42	.57
授業理解促進			—	.30**	2.1	.38	.49
規範意識育成				—	2.3	.54	.53

\*\* $p < .01$ 

## 4- (3) 学年群と各下位尺度の各得点による分散分析結果

質問紙調査において、学年ごとの評価を調べるために、中学1年生(168人)、中学2年生(158人)、中学3年保護者(166人)の3つに分け学年群を設定した。この学年群を独立変数、下位尺度である「個及び対話を重視した教育」「自己管理能力育成」「授業理解促進」「規範意識育成」の4得点を従属変数とする3水準×4要因の分散分析を行った。分散分析の結果、学年群( $F(2, 489) = 6.10, p < .01$ )、下位尺度得点( $F(3, 487) = 41.3, p < .001$ )の主効果が有意であったが、交互作用( $F(6, 976) = 1.55 \text{ n.s.}$ )は有意ではなかった。表6に学年群と下位尺度得点の分散分析結果を示す。学年群の主効果が有意だったので、多重比較を行った。その結果、3年生と2年生は1年生より有意に高い得点であった(3年生、2年生 > 1年生, LSD法、( $p < .05$ ))。これは、1年生はまだ学校に入学したばかりで、比較的厳しく自己評価をしていたことが推察される。同様に下位尺度得点の多重比較を行った。その結果、「規範意識育成」 > 「個及び対話を重視した教育」 > 「自己管理能力育成」 > 「授業理解促進」(LSD法、 $p < .05$ )の順であった。したがって生徒は、「規範意識育成」、「個及び対話を重視した教育」、「自己管理能力育成」、「授業理解促進」の順で評価をしていることとなる。

学校における最小のコミュニティは学級組織であり、その上に学年、学校という形で組織のコミュニティが存在する。その中で組織を維持していくためのルールや規範意識の向上は大変重要な基盤的な要因となる。そのような観点から規範意識の育成が高く評価されているということは、様々なレベルにおける生徒指導が、生徒たちのモラルの向上に関して効果的に機能するとともに、自主・自律性が養われ、生徒たちの規範への意識が高まっているものと考えられる。また、授業理解促進に関する得点が低いということは、教師の授業を低く評価していることであり、分かりやすい授業、個の考えを大切にしたい授業等の授業の展開や在り方について検討していく必要があると考えられる。



表6. 学年群と下位尺度得点による分散分析結果（生徒）

	1年生 (n=168)	2年生 (n=158)	3年生 (n=166)	校種群 F	因子得点 F	交互作用 F
個及び対話を重視した教育	2.12 (.33)	2.23 (.34)	2.24 (.33)	6.1**	41.3***	1.55
自己管理能力育成	2.09 (.32)	2.17 (.33)	2.17 (.32)			
授業理解促進	1.97 (.29)	2.04 (.30)	2.46 (.30)			
規範意識育成	2.25 (.42)	2.32 (.43)	2.34 (.42)			

\*\*\* p&lt;.001 \*\*p&lt;.01

## 4－（４）因果関係の検討

生徒質問紙調査から抽出した4つの下位尺度が学校生活の充実に与える影響を検討するために、まず全生徒を対象に、学校生活の充実の項目を従属変数として、「個及び対話を重視した教育」「自己管理能力育成」「授業理解促進」「規範意識育成」の下位尺度得点を独立変数とする重回帰分析を行った。同様に1年生、2年生、3年生のそれぞれに対して、学校生活の充実の項目を従属変数として、「個及び対話を重視した教育」「自己管理能力育成」「授業理解促進」「規範意識育成」の下位尺度得点を独立変数とする重回帰分析を行った。結果を表7に示す。なお、表8には、下位尺度得点と学校生活の充実との相互相関（全生徒）、表9には、下位尺度得点と学校生活の充実との相互相関（1年生）、表10には、下位尺度得点と学校生活の充実との相互相関（2年生）、表11には、下位尺度得点と学校生活の充実との相互相関（1年生）についてそれぞれ示してある。以上から、図1に示したように重回帰分析に基づくパス図を作成した。全生徒、1年生、2年生、3年生の各因子間には全てにおいて1%水準で有意な相関関係が見られた。標準化係数（ $\beta$ ）は、有意なパスのみ描いてある。

表7. 重回帰分析結果

	全体( $\beta$ )	1年生( $\beta$ )	2年生( $\beta$ )	3年生( $\beta$ )
個及び対話を重視した教育	.25***	.16**	.27**	.31***
自己管理能力育成	.07	.25**	.04	.00
授業理解促進	.04	.08	.01	.04
規範意識育成	.03	-.15	.27**	.03
R2	.10***	.12***	.19***	.10**

\*\*\* p&lt;.001 \*\*p&lt;.01

表8. 下位尺度得点と学校生活の充実との相互相関（全生徒）

	個及び対話を重視した教育	自己管理能力育成	授業理解促進	規範意識育成	学校生活の充実
個及び対話を重視した教育	—	.50**	.42**	.40**	.33**
自己管理能力育成		—	.39**	.36**	.23**
授業理解促進			—	.30**	.18**
規範意識育成				—	.18**
学校生活の充実					—

\*\*p&lt;.01

表9. 下位尺度得点と学校生活の充実との相互相関（1年生）

	個及び対話を重視した教育	自己管理能力育成	授業理解促進	規範意識育成	学校生活の充実
個及び対話を重視した教育	—	.47**	.26**	.31**	.27**
自己管理能力育成		—	.20**	.38**	.27**
授業理解促進			—	.23**	.14**
規範意識育成				—	.03**
学校生活の充実					—

\*\*p&lt;.01

表10. 下位尺度得点と学校生活の充実との相互相関（2年生）

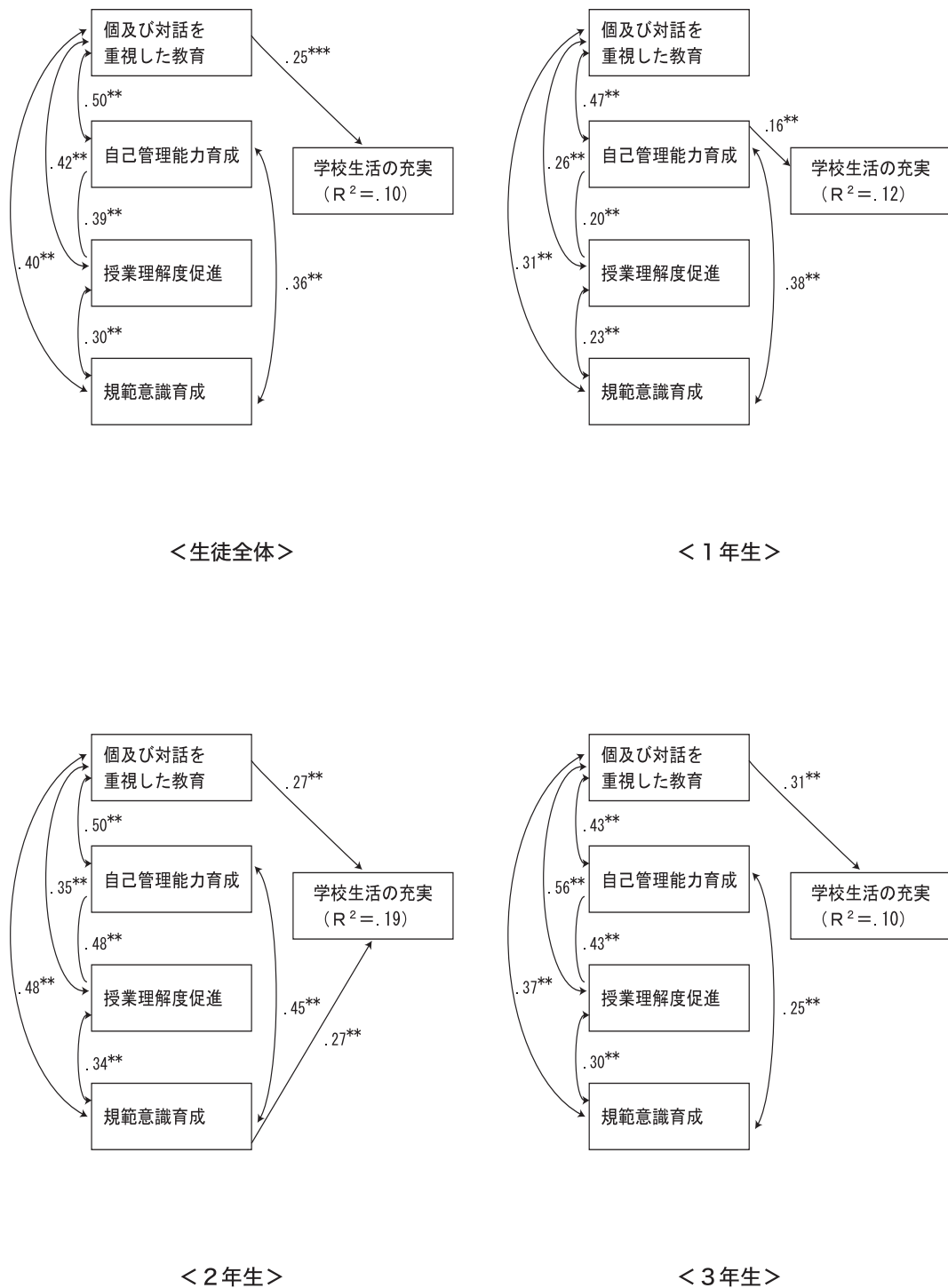
	個及び対話を重視した教育	自己管理能力育成	授業理解促進	規範意識育成	学校生活の充実
個及び対話を重視した教育	—	.50**	.35**	.48**	.40**
自己管理能力育成		—	.48**	.45**	.24**
授業理解促進			—	.34**	.17*
規範意識育成				—	.40**
学校生活の充実					—

\*\*p&lt;.01

表11. 下位尺度得点と学校生活の充実との相互相関（3年生）

	個及び対話を重視した教育	自己管理能力育成	授業理解促進	規範意識育成	学校生活の充実
個及び対話を重視した教育	—	.43**	.56**	.37**	.32**
自己管理能力育成		—	.43**	.25**	.18*
授業理解促進			—	.30**	.21**
規範意識育成				—	.11
学校生活の充実					—

\*\*p&lt;.01



注：各因子間はずべてにおいて1%水準で有意な相関がある。また標準化係数（ $\beta$ ）は、有意なパスのみ描いてある。 \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

図1. パス解析結果

＜生徒全体＞のパス解析結果から、「個及び対話を重視した教育」の標準化回帰係数が有意であったが、「自己管理能力育成」、「授業理解促進」、「規範意識育成」の標準化回帰係数は有意ではなかった。＜1年生＞では、「自己管理能力育成」の標準化回帰係数のみが有意であり、＜2年生＞では、「個及び対話を重視した教育」と「規範意識育成」の標準化回帰係数のみが有意であり、＜3年生＞では、「個及び対話を重視した教育」の標準化回帰係数が有意であった。

以上からA中学校の生徒は、学校生活の充実は、生徒自身が大切にされる、先生との対話が多い、悩みがあればすぐに相談にのってくれるという指導体制が充実すればするほど学校生活に対する充実度は増すと捉えていることが明らかとなった。1年生は、計画を立てて時間を有効に活用できることや自ら健康管理ができるようになるなど自律性が高まるほど学校生活に対する充実度は増すと捉えている。2年生は、生徒自身が大切にされる、先生との対話が多い、悩みがあればすぐに相談にのってくれるという指導体制が充実するほど、さらに学校のルールを守るなどの規範意識を育成することが手厚いほど学校生活に対する充実度は高まると捉えている。3年生は、生徒自身が大切にされる、先生との対話が多い、悩みがあればすぐに相談にのってくれるという指導体制が充実すればするほど学校生活に対する充実度は高まると捉えている。それぞれの学年における指導の特性や生徒の意識が反映され、このような結果になったと考えられる。それぞれの学年に所属する教師がこれらの結果を踏まえ、改善点を明確に意識した上で、教育活動を推進していくことが生徒の意を汲んだ学校改善へとつながっていくものであると考えることができる。

## 5. 終わりに

公立学校への学校評価の導入が進み、学校評価に関する質問紙調査が実施されているが、大変な労力をして実施した調査にも関わらず、そのデータの有効活用が成されていないという問題意識から、S市A中学校の質問紙調査を用いて、データの統計的分析を行った。分析に関しては、データの意味を集約し構造化する因子分析、各学年のデータ間の差を分析する分散分析、抽出した各因子との相関関係を分析する重回帰分析を用いた。こうした数量的な解析の導入により、学校に内在する成果や課題を具体的に示すとともに評価に関する新たな視点を示した。こうした実証的なデータによって評価の信憑性をあげ、信頼へ結びつく評価へ繋がるのが可能になると考える。学校の状態や質問紙の内容項目の設定によってデータの構造も変化することが考えられるが、今後いくつかの学校と連携協力を図る中で、学校評価の質問紙調査の分析方法に関する研究を進めていきたい。

最後に、本研究の推進に関して、協力をいただいたS市A中学校の校長先生はじめ職員の皆様にこの紙面を借りてお礼を申し上げます。

## 【参考文献】

金子郁容編（2005）『学校評価 情報共有のデザインとツール』筑摩書房，pp37-50

木岡一明（2005）『学校評価の「問題」を読み解く 学校の潜在力の解発』教育出版

善野八千子（2007）『学校力・教師力を高める学校評価』明治図書，pp. 109-121

文部科学省（2000 a）『学校評議員制度の設置状況』

URL : [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/16/11/04110401.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/11/04110401.htm)

文部科学省（2000 b）『学校評価について』

URL : [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakko-hyoka/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakko-hyoka/index.htm)

文部科学省（2008）『義務教育諸学校における学校評価ガイドライン』

URL : [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/03/06032817/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/03/06032817/003.htm)

Shared Questionnaire System Development Project（2008）『Shared Questionnaire System  
基本操作マニュアル』

URL : <http://sqs-xml.sourceforge.jp/>

